

## 看護学生の精神障がい者に対するイメージの変化

田邊要補・藤田 勇<sup>1)</sup>・田沼佳代子<sup>2)</sup>

(受理日 2015年9月28日, 受稿日 2015年12月24日)

### Change of the nursing students' image for the mentally disabled

Yosuke TANABE・Isamu FUJITA<sup>1)</sup>・Kayoko TANUMA<sup>2)</sup>

(Received Sept. 28, 2015, Accepted Dec. 24, 2015)

#### はじめに

日本で脱施設化が進まない理由の一つに、精神障がい者に対する偏見や差別があげられる。地域で暮らす精神障がい者のための施設を建てようとしても、住民の反対で実現がはばまれるという事態もある<sup>1)</sup>。偏見や差別が根強く残っている原因としては精神障がい者に対する収容という施策が行われてきたことやマスコミ報道<sup>2)</sup>、そして精神障がい者が登場してくるドラマなどが影響していることが少なくない。一般的に、そこから生まれてくるイメージは精神障がい者に対する恐れや恐怖感といった否定的なイメージが多いようである。

看護教育を行ううえで、精神障がい者に対し看護学生がどのようなイメージをもっているのかを知ることは意味あることである。精神障がい者に対する看護学生のイメージに関しては、数多くの研究がなされている。講義に関する研究では、1・2年生の精神看護学の講義前後では

態度の変化は少ないとの報告<sup>3)</sup>や1年生の精神保健の講義前後の評価の比較から精神障害に対する否定的感情が好ましい方向に変化したとの報告<sup>4)</sup>がある。また、1年生の精神看護学関連授業開始時では、精神障がい者や精神疾患に対するイメージは曖昧なものが多く、約半数の学生が恐れを抱いているとの報告<sup>5)</sup>や講義において精神障がい者と話す機会を設けることによってイメージが変化する<sup>4)</sup>との報告もある。実習に関する研究では、精神看護学臨地実習前後の比較をしたものが多く、実習後にイメージが肯定的になったと報告<sup>3,6-10)</sup>しているものがほとんどである。学年比較に関する研究では、1年次と3年次の違う学生や1年次から4年次の違う学生に調査を行い、精神障がい者に対するイメージを学年比較した横断的研究<sup>11,12)</sup>がある。また、同じ学生を対象とし、1年次の授業前と2年次の授業後に精神障害に対するイメージについて調査した研究<sup>13)</sup>がある。

今回、1年生の入学時から同じ集団を3年間追うことで、看護学生が精神障がい者に対してどのようなイメージを持ち、在学中にどのように変化していくのかを知ることを目的に、4回

1) 北里大学保健衛生専門学院保健看護科

2) 桐生大学医療保健学部看護学科

のアンケート調査を行ったので報告する。

## 方 法

### 1. 研究対象者

A 大学医療保健学部看護学科 2010 年度入学生 97 名および B 専門学院看護科 (4 年制) 2010 年度入学生 80 名の合計 177 名を調査対象とし、同意が得られた 107 名を分析対象とした。

### 2. アンケート実施時期

1 年生入学時「2010 年 5 月」、1 年生終了時「2011 年 3 月」、2 年生終了時「2012 年 3 月」、3 年生終了時「2013 年 3 月」。

### 3. 研究デザイン

量的研究、縦断調査。

### 4. 調査内容

調査項目は、性別、年齢、精神看護学に対する興味の有無からなるプロフィール項目と、精神障がい者に対するイメージにかかわる項目、精神障がい者と接した経験有無の項目から構成されている。精神障がい者に対するイメージにかかわる項目は、「精神障がい者を具体的にどのように思っているか」、「その思いに対するイメージ」、「そう思うようになったきっかけや出来事」、「その時期」の 4 項目をたずねた。精神障がい者に対するイメージは、回答者が精神障がい者に対するイメージを複数回答できるように 6 個の回答欄を設けた。精神障がい者と接した経験有無の項目は、「精神障がい者と接した経験の有無」、「接した時期」、「場所や内容」の 3 項目をたずねた。調査用紙の概要は、表 1 の通りである。

表 1 調査用紙の概要

1. プロフィール項目	
性別	
年齢	
精神看護学に対する興味の有無	
2. 精神障がい者に対するイメージにかかわる項目 (複数回答)	
・精神障がい者を具体的にどのように思っているか (自由記載)	
・その「思いに対するイメージ」	
1. プラス	2. マイナス
3. どちらでもない	
・そう思うようになった「きっかけ」や「出来事」 (自由記載)	
・その「時期」	
1. 小学校入学前	2. 小学校低学年
3. 小学校高学年	4. 中学校時代
5. 高校時代	6. 大学・短大等
7. 社会人	8. 在学 1 年次
9. 在学 2 年次	10. 在学 3 年次
3. 精神障がい者と接した経験の有無の項目	
・精神障がい者と接した経験の有無	
「はい」と答えた人	
・時期	
1. 小学校入学前	2. 小学校低学年
3. 小学校高学年	4. 中学校時代
5. 高校時代	6. 大学・短大等
7. 社会人	
・場所や内容 (自由記載)	

### 5. データ分析方法

収集したデータは、①学年 (1 年生入学時、1 年生終了時、2 年生終了時、3 年生終了時) とイメージ (プラス、マイナス、どちらでもない)、②学年 (1 年生入学時、1 年生終了時、2 年生終了時、3 年生終了時) とイメージの数 (単独の人、複数もつ人)、③接したこと (ある、ない) とイメージ (プラス、マイナス、どちらでもない) ④接したこと (ある、ない) とイメージの数 (単独の人、複数もつ人)、⑤精神障がい者と接した時期 (小学生、中学生、高校生、短大・大学生) とイメージ (プラス、マイナス、どちらでもない) について、⑥精神看護学臨地実習経験の有無 (ある、ない) とイメージについて  $\chi^2$  検定を実施し、5%未満を有意水準とした。統計処理には IBM SPSS Statistics Ver22.0 を用いた。

## 6. 倫理的配慮

研究協力者に対し、本研究の趣旨や目的、プライバシーの保護（データの取り扱い・調査票の保管）、研究への参加や辞退が自由であること、研究への参加・不参加によって不利益を受けないこと、研究への参加の有無が学業成績や単位取得に影響を与えない等を口頭と書面で説明した。また、データを取り扱う際は、個人が特定されないように配慮しデータ入力および処理をした。さらに、コードと氏名が連結された個人情報を含むファイルは集計用データ・ファイルとは別の独立したファイルとして別々に保管した。研究開始前には、桐生大学倫理委員会の承認を得た。

## 結果

### 1. 対象者

質問紙の回収数は94（有効回収率88.8%）であった。有効回答数の内訳は、男性16（17.0%）・女性78（83.0%）であった。1回目の調査日まで

に精神障がい者と接した経験の有無については、経験がある48（51.1%）・経験がない46（48.9%）であった。精神看護学に対する興味については、ある48（52.2%）・ない9（9.8%）・どちらでもない（38.0%）であった。

### 2. 各項目の分析結果（複数回答）

1) 学年（1年生入学時、1年生終了時、2年生終了時）とイメージ（プラス、マイナス、どちらでもない）

1年生入学時の精神障がい者に対するイメージの数は124あり、プラスのイメージ16（12.9%）、マイナスのイメージ59（47.6%）、どちらでもないのイメージ49（39.5%）であった。3年生終了時の精神障がい者に対するイメージの数は122あり、プラスのイメージ41（33.6%）、マイナスのイメージ31（25.4%）、どちらでもないのイメージ50（40.1%）であった。詳細については表2に示し、イメージの推移については図1に示す。有意差が出たものは、次の①～③の通りである。

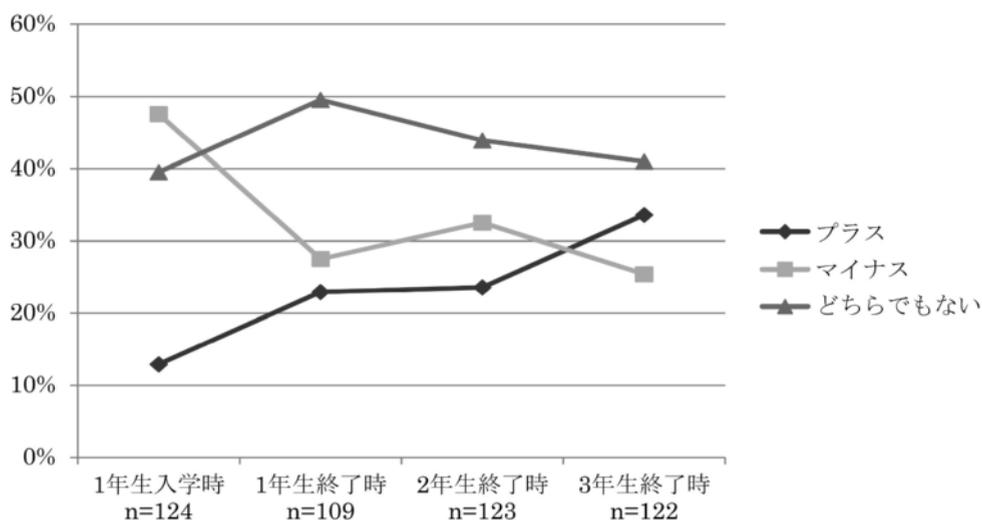


図1 学年とイメージ（複数回答）

表2 学年とイメージ

	プラス	マイナス	どちらでもない	合計
1年生入学時	16 (12.9%)	59 (47.6%)	49 (39.5%)	124 (100%)
1年生終了時	25 (22.9%)	30 (27.5%)	54 (49.5%)	109 (100%)
2年生終了時	29 (23.6%)	40 (32.5%)	54 (43.9%)	123 (100%)
3年生終了時	41 (33.6%)	31 (25.4%)	50 (41.0%)	122 (100%)

## ① 1年生入学時と1年生終了時の比較

「1年生入学時にマイナスが多い」と「1年生終了時にどちらでもないが多い」に有意差 ( $p < 0.05$ ) がみられた。

## ② 1年生入学時と2年生終了時の比較

「1年生入学時にマイナスが多い」「2年生終了時にプラスが多い」「2年生終了時にマイナスが多い」に有意差 ( $p < 0.05$ ) がみられた。

## ③ 1年生入学時と3年生終了時の比較

「1年生入学時にマイナスが多い」「3年生終了時にプラスが多い」「3年生終了時にマイナスが多い」に有意差 ( $p < 0.01$ ) がみられた。

2) 学年(1年生入学時, 1年生終了時, 2年生終了時, 3年生終了時)とイメージの数(単独の人, 複数もつ人)

イメージが単独の人は1年終了時に増え, その後徐々に減少する。イメージを複数もつ人は1年終了時に減り, その後徐々に増加する。詳細については表3に示し, イメージを複数もつ人の内訳は表4に示す。調査時期の比較は次の①~③の通りである。

表3 学年とイメージの数

	単独	複数	複数の割合	合計
1年生入学時	70	24	25.5%	94
1年生終了時	78	16	17.0%	94
2年生終了時	67	27	28.7%	94
3年生終了時	63	31	33.0%	94

表4 イメージを複数もつ人の内訳

	プラス+マイナス	プラス+どちらでもない	マイナス+どちらでもない	プラス+マイナス+どちらでもない	合計
1年生入学時	10	2	10	2	24
1年生終了時	7	4	4	1	16
2年生終了時	9	5	10	3	27
3年生終了時	12	9	8	1	30

## ① 1年生入学時と1年生終了時の比較

1年生入学時イメージが単独の人で, 1年生終了時に複数のイメージに変化した人は3名であった。1年生入学時イメージが複数の人で, 1年生終了時に複数のイメージのままだった人は13名であった。詳細については表5に示す。

表5 1年生入学時と1年生終了時のイメージの数

		1年生終了時		合計
		単独	複数	
1年生入学時	単独	67	3	70
	複数	11	13	24
合計		78	16	94

## ② 1年生終了時と2年生終了時の比較

1年生終了時イメージが単独の人で, 2年生終了時に複数のイメージに変化した人は19名であった。1年生終了時イメージが複数の人で, 2年生終了時に複数のイメージのままだった人は8名であった。詳細については表6に示す。

表6 1年生終了時と2年生終了時のイメージの数

		2年生終了時		合計
		単独	複数	
1年生終了時	単独	59	19	78
	複数	8	8	16
合計		67	27	94

## ③ 2年生終了時と3年生終了時の比較

2年生終了時イメージが単独の人で, 3年生終了時に複数のイメージに変化した人は12名で

あった。2年生終了時イメージが複数の人で、3年生終了時に複数のイメージのままだった人は18名であった。詳細については表7に示す。

表7 2年生終了時と3年生終了時のイメージの数

		3年生終了時		合計
		単独	複数	
2年生終了時	単独	56	12	68
	複数	8	18	26
合計		64	30	94

3) 接したこと（ある，ない）とイメージ（プラス，マイナス，どちらでもない）

1年生入学時に接したことあり，プラスのイメージの人は15名，3年生終了時に接したことあり，プラスのイメージの人は22名であった。1年生入学時に接したことなく，プラスのイメージの人は1名，3年生終了時は接したことなく，1プラスのイメージの人は9名であった。

1年生入学時に接したことあり，マイナスのイメージの人は36名，3年生終了時は接したことあり，マイナスのイメージの人は19名であった。1年生入学時は接したことなく，マイナスのイメージの人は23名，3年生終了時は接したことなく，マイナスのイメージの人は12名であっ

た。詳細については表8に示す。

4) 接したこと（ある，ない）とイメージの数（単独の人，複数もつ人）

接触経験とイメージ数の1年生入学時から3年生終了時までの累計では，接したことのあ  
る・ないにかかわらずイメージは単独の人が多  
い。イメージが複数の人は接触経験がある人が  
多い。詳細については表9に示す。また，接触  
経験と各学年のイメージ数については表10  
～表13に示す。

5) 精神障がい者と接した時期（小学生，中学生，高校生，短大・大学生）とイメージ（プラス，マイナス，どちらでもない）

精神障がい者に接した時期と1年生入学前のイメージでは，小学校低学年と答えた人が21名と最も多く，次いで小学校高学年と答えた人が19名であった。小学校低学年では，プラスが1名，マイナスが11名どちらでもないが9名であった。小学校高学年ではプラスが6名，マイナスが8名どちらでもないが5名であった。詳細については表14に示す。

表8 接触経験の有無とイメージ

		プラス	マイナス	どちらでもない	合計
1年生入学時	接したことある	15 (12.1%)	36 (29.0%)	28 (22.6%)	124 (100.0%)
	接したことない	1 (0.8%)	23 (18.5%)	21 (16.9%)	
1年生終了時	接したことある	19 (17.4%)	20 (18.3%)	28 (25.7%)	109 (100.0%)
	接したことない	6 (5.5%)	10 (9.2%)	26 (23.9%)	
2年生終了時	接したことある	19 (15.4%)	25 (20.3%)	28 (22.8%)	123 (100.0%)
	接したことない	10 (8.1%)	15 (12.2%)	26 (21.1%)	
3年生終了時	接したことある	22 (18.0%)	19 (15.6%)	26 (21.3%)	122 (100.0%)
	接したことない	19 (15.6%)	12 (9.8%)	24 (19.7%)	

表9 接触経験とイメージ数の1年生入学時から3年生終了時までの累計

イメージの数	接したこと		合計
	ある	ない	
単 独	120	157	277
複 数	75	23	98
合 計	195	180	375

表10 接触経験と1年生入学時のイメージの数

イメージの数	接したこと		合計
	ある	ない	
単 独	28	42	70
複 数	23	1	24
合 計	51	43	94

表11 接触経験と1年生終了時のイメージの数

イメージの数	接したこと		合計
	ある	ない	
単 独	38	40	78
複 数	15	1	16
合 計	53	41	94

表12 接触経験と2年生終了時のイメージの数

イメージの数	接したこと		合計
	ある	ない	
単 独	30	37	67
複 数	20	7	27
合 計	50	44	94

表13 接触経験と3年生終了時のイメージの数

イメージの数	接したこと		合計
	ある	ない	
単 独	24	39	63
複 数	17	14	31
合 計	41	53	94

6) 精神看護学臨地実習経験の有無(ある, ない)とイメージ(プラス, マイナス, どちらでもない)

精神看護学臨地実習はA大学の3年生59名が終了し, B専門学の35名は終了していない。精神看護学臨地実習経験の有無とイメージでは, 精神看護学臨地実習経験者はプラスが34名で未経験者は7名であった。「実習経験のある人にプラスが多い」に有意差( $p < 0.05$ )があった。詳細については表15に示す。実習経験者でイ

表14 精神障がい者に接した時期と1年生入学時のイメージ

接触時期	プラス	マイナス	どちらでもない	合計
小学校入学前	4	4	2	10
小学校低学年	1	11	9	21
小学校高学年	6	8	5	19
中学校時代	1	7	7	15
高校時代	3	4	4	11
大学・短大等	0	1	1	2
社会人	0	1	0	1
合計	15	36	28	79

表15 精神看護学臨地実習経験の有無とイメージ

		実習経験		合計
		あり	なし	
3年生終了時	プ ラ ス	34*	7	41
	マ イ ナ ス	19	12	31
	どちらでもない	27	23	50
	合 計	80	42	122

\* :  $p < 0.05$

表16 精神看護学臨地実習経験者でイメージを併せもっている人の内訳

イ メ ー ジ	人数
プラス+マイナス	11
プラス+どちらでもない	7
マイナス+どちらでもない	3
プラス+マイナス+どちらでもない	1
合 計	22

メージを併せもっている人は22名(実習経験者中の37.3%)であった。そのうち11名(50.0%)は「プラス」「マイナス」のイメージを併せもっていた。詳細については表16に示す。

## 考 察

1年生入学時にマイナスのイメージが55(47.0%)と最も多く, どの学年の終了時と比べても有意に差が出ている。この結果は, 石毛ら<sup>4)</sup>の講義受講前の看護学生から抽出された「精神病に対する否定的な感情」「危険性の認識」や村井ら<sup>5)</sup>の“約半数の学生が恐れをいっている”との報告と同じ傾向である。その要因としては, 表14からもわかるように, 小・中学校の

時に精神障がい者と接した経験が大きいことが推察できる。Atkinsonら<sup>14)</sup>は記憶の“二重貯蔵モデル”で、私たち人間に入力された刺激情報が長期記憶に貯蔵されれば、刺激情報はほぼ永久に定着すると述べている。それは、今まで未知だった精神障がい者に対する情報が、ある経験によって新しく「追加」されたと推測される。プラスのイメージよりもマイナスのイメージのほうがインパクトが強く、記憶に残りやすく、マイナスのイメージをもったまま大学等に入学してくるのではないかということが考えられる。

1年生入学時にマイナスのイメージが多かったが、1年生終了時にはどちらでもないが多くなり、2年生および3年生終了時にはプラスとマイナスのイメージが多くなった。変化の要因としては、石毛ら<sup>4)</sup>の受講後に“精神障害に対する否定的感情などが好ましい方向に変化した”や小山内ら<sup>13)</sup>が講義後に“イメージの対象疾患が統合失調症となるものが多い”と報告しているように講義による影響が大きい。講義が学生のイメージ形成に与える影響は精神看護学が一番大きいことは確かであるが、精神看護学のみならず、基礎看護学を始めとする様々な講義を受けることにより、「人」を看護するという姿勢も学んでいるのではないかと思う。精神看護学を中心に様々な講義を受けたことにより、「プラス」や「どちらでもない」のイメージをもつ学生が多くなったと考える。また、図1が示すように、2年生終了時から3年生終了時にかけて、マイナスのイメージとプラスのイメージが逆転している。これは、福田ら<sup>9)</sup>の精神看護学実習後に“75%の学生のイメージが改善された”に代表されるように実習による影響が大きい。精神看護学実習で患者さんと触れあうことで、精神障がい者も一人の人間であることを理解してい

るのだと思う。しかし、逆にどちらでもない人がマイナスになったりする学生もいた。それは精神障がい者の捉え方が定まっておらず、「ちょっと違う人＝精神障がい者」というイメージがあるのではないだろうか。何故なら、精神障がい者に対する知識も少なく、接したとしても短時間だからである。また、実習でのマイナスイメージの形成は、患者さんとの関わりの中で戸惑ったり傷ついたりすることだけでなく、福田ら<sup>9)</sup>の報告にあるように“実習施設や環境”も要因としてあげられる。

看護学生の精神障がい者に対するイメージは、表4「イメージを複数もつ人の内訳」より、プラスあるいはマイナスなど1つだけのイメージではなく、肯定的あるいは否定的な複数のイメージを併せもっている人が少なくないということが分かった。イメージの変化の要因としては、今述べたように実習の影響が大きく、このことは様々な文献と同じ傾向にある。実習を経験し、精神障がい者の良い面を捉えることができ「プラス」のイメージをもつ学生が多くなったと考える。しかし、「プラス」のイメージだけでなく「マイナス」のイメージを併せもっている学生も見られた。それは精神障がい者と実際に触れあい、「気遣いしてくれる」「障がいも一つの個性」等プラスのイメージを形成すると同時に「目が鋭い」「何を考えているかわからない」「支えていくのが大変」等マイナスのイメージを形成している。精神障がい者と接した経験があると言っても精神障がい者の一部分だけを見てイメージを形成している。そのため、色々な情報が入るとイメージが追加され、複数のイメージを持ちやすくなると考えられる。

今回の研究では、入学時から3年生終了時までの調査結果からの報告である。先行研究では、

肯定的になったイメージが半年後には元に戻ったとの報告<sup>15)</sup>もある。今後は、看護学生のイメージの変化を具体的に探っていくこととともに、入学時から卒業時までの調査報告が求められる。

## まとめ

今まで述べてきたことから、次のようなことが言える。マイナスのイメージをもったまま大学等に入学しても、専門的な教育を受けることで新たなイメージが形成されている。このように、精神障がい者に対するイメージは入れ替わるのではなく、「学習」や「実習」などの経験や体験によって新たなイメージが追加され、時には相反するイメージをもち、全体のイメージが形成されていくと考えられる。このような結果から、意図的に良いイメージを与えようと教授すれば、良いイメージが形成される可能性も考えられる。したがって、教授者の主観にとらわれることなく、その時代を反映した、偏らない精神障がい者の理解をしてもらえよう教授法が求められる。

## 謝辞

本研究の趣旨を理解し、ご協力をいただきました A 大学医療保健学部看護学科 2010 年度入学生および B 専門学院看護科 2010 年度入学生の皆様に深く感謝いたします。

## 文献

- 1) 武井麻子. “序章 この本で伝えたいこと”. 精神看護の基礎. 武井麻子, 末安民生, 小宮敬子ほか. 医学書院, 2013, p.2-17, ISBN9784260015882
- 2) 松下正明, 坂田三允. “第1章 現代社会と精神看護学”. 精神看護学 改訂版. 松下正明, 坂田三允, 樋口輝彦. 医学芸術社, 2009, p.26-78, ISBN9784870543195
- 3) 伊東由賀, 山崎美晴, 永利美花ほか. 精神障害に対する看護学生の態度の変化. 日本保健科学学会誌. 2005, 7(4), p.241-249.
- 4) 石毛奈緒子, 林直樹. 看護学生の「精神障害者」に対するイメージ-精神保健の講義による変化-. 日本社会精神医学会雑誌. 2000, 9(1), p.11-21.
- 5) 村井里依子, 岩崎みすず, 小林美子. 授業開始時における学生の精神障害者および精神疾患に対するイメージ. 長野県看護大学紀要. 2001, 3, p.21-29.
- 6) 中島充代, 梅津郁美. 看護学生の精神障がい者に対するイメージと社会的距離の変化-精神科経験と講義・実習の影響-. 大阪信愛女学院短期大学紀要. 2010, 44, p.13-18.
- 7) 岡本隆寛, 阿部由香, 松本孚. <報告> 精神看護実習前後における看護学生の精神科に対するイメージの変化 (第1報). 順天堂医療短期大学紀要. 2002, 13, p.88-95.
- 8) 村井里依子, 松崎緑, 岩崎みすずほか. 学生が実習前後に抱く精神障害者のイメージ-精神看護実習前後の比較を通して-. 長野県看護大学紀要. 2002, 4, p.41-49.
- 9) 福田由紀子, 小林純子. 精神看護学実習前後における看護学生の精神障害者へのイメージの変化. 日本赤十字愛知短期大学紀要. 2003, 14, p.123-131.
- 10) 木村洋子, 吉村雅世, 東浦雅子ほか. 看護学生がもつ精神障害者のイメージについて. 奈良県立医科大学看護短期大学部紀要. 2001, 5, p.43-49.
- 11) 斎藤秀光, 光永憲香, 齋二美子. 看護学生における精神障害者のイメージの変化について. 東北大学医学部保健学科紀要. 2007, 16(2), p.105-113.
- 12) 西岡大喜, 天谷真奈美. 看護学生の精神疾患患者イメージの学年推移と影響要因に関する調査. 日本精神科看護学術集会誌. 2013, 56(2), p.167-171.
- 13) 小山内隆生, 加藤拓彦, 田中真. 精神障害に関する知識が精神障害者に対する学生のイメージに及ぼす影響-1年間の追跡調査から-. 保健科学研究. 2011, 1, p.71-77.
- 14) Atkinson RC; Shiffrin RM. The control processes of short-term memory. Scientific American. 1971, (225), p.82-90.
- 15) 渡邊敦子, 横山恵子, 石田靖子. 看護学生の精神看護学実習を通しての精神障害者のイメージの変化. 日本看護学会論文集看護教育. 2001, 32, p.50-52.